

中海の有用貝類（サルボウガイ）基礎調査

（中海有用水産動物モニタリング事業）

古谷尚大・佐々木 正

1. 研究の目的

中海における有用貝類の発生量や分布状況について継続的なモニタリング調査を行うことにより、資源量や環境の変化を把握し、今後の増殖方法や有効利用方法を検討するための基礎資料とする。

2. 研究方法

サルボウガイの浮遊幼生の分布を把握するため、中海中央と意東に設けた調査定点において6月～8月に計4回調査を行った。表層から深度1 m毎に水中ポンプを用いて海水250 lをくみ上げ、目合い50 μ mと100 μ mのプランクトンネットにより濾過して、前期幼生（目合い100 μ mのネットを通過し、50 μ mのネットに残ったもの）と後期幼生（目合い100 μ mのネットに残ったもの）の2種類のサイズのサンプルを採取した。サンプルから核酸自動抽出機QuickGene-810とDNA組織キットを用いてDNAを抽出し、定量PCR法により幼生の同定と海水1 k l当りDNAコピー数の計数を行い、既存の換算式を用いて幼生の採集密度を計算した。

3. 研究結果

6月22日、7月6日、20日および8月6日の調査では後期幼生の出現数は両調査定点ともに例年より少なく、この原因としては湖底の水温上昇が例年より遅れている影響が考えられた。その後、8月上～中旬に中海中央の底層水温が産卵水温である25℃に達したことから、採苗適期と判断し、8月17日に中海漁業協同組合が採苗器200袋を設置し天然採苗を開始した。

11月に採苗器の一部を当センターが回収して採苗数を計数した。回収した稚貝のうち養殖に適する平均殻長7 mm以上の大型の稚貝数は1採苗器当たり平均1.7万個（平均殻長10 mm）で、設置した採苗器全体に引き伸ばした場合の推定総稚貝数は約334万個と推定された。平均殻長7 mm未満の小型の稚貝（1採苗器当たり平均0.6万個）も含めた推定総稚貝数は約460万個となり、近年で最も良好な結果となった。今年度は産卵期が例年より遅

くなったものの、採苗器を設置した8月中旬以降に一斉に出現した幼生が効率よく採集されたものと考えられる。

4. 研究結果

調査で得られた結果は、中海漁業協同組合に提供することで、サルボウガイの天然採苗を行う際の資料として活用された。